

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近くに形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。また、本遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離をもつが、中世以前には、遺跡の南側近くに瀬戸内海の影響が強く及んでいたことが想定される。

遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまで遡り、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている⁽¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認される⁽²⁾。こうした人間活動が広がりを見せるのは、縄文時代中期以降である。竪穴住居や貯蔵穴群などが残る中期中葉～後期中葉の津島岡大遺跡⁽³⁾、旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁽⁴⁾は、その代表的遺跡である。いずれも丘陵裾付近に形成された集落であるが、これらの遺跡は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代早期（突帯文土器の段階）につながっていく。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡⁽⁵⁾～津島遺跡周辺⁽⁶⁾あるいは百間川沢田遺跡～原尾島遺跡⁽⁷⁾において水田遺構が調査されている。早期とされる津島江道遺跡の水田時期についての評価は確定していない⁽⁸⁾が、水稻農耕の情報岡山平野にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確実であろう。

集落では、前期前半は津島遺跡⁽⁹⁾に限定的であるが、その後、南方遺跡⁽¹⁰⁾・雄町遺跡⁽¹¹⁾・百間川沢田遺跡⁽¹²⁾・同原尾島遺跡⁽¹³⁾などが出現する。さらに数が増加していくのは中期後半以降である。中期後半～後期前葉の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、三角州の形成に伴うかのように、前期末葉～中期前半の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡⁽¹⁴⁾や上伊福九坪遺跡⁽¹⁵⁾へと場所が移動し、後期には津島遺跡⁽¹⁶⁾や伊福定国前遺跡⁽¹⁷⁾などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡⁽¹⁸⁾、後期には天瀬遺跡⁽¹⁹⁾が加わり、遺跡群のまとまりをみることができる。一方、旭川東岸では、雄町遺跡などのように前期から後期に至る継続性の高い遺跡が多いという特徴が指摘されるが、同平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡⁽²⁰⁾、後期に同原尾島遺跡⁽²¹⁾へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期にはいると平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれているが、こうした弥生墳丘墓や前方後円（方）墳は、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡のある旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳⁽²²⁾の系列を当てることができる⁽²³⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳⁽²⁴⁾、金蔵山古墳⁽²⁵⁾、湊茶臼山古墳⁽²⁶⁾という全長150m級の前方向後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模が縮小する傾向が、旭川西岸の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況がみてとれる。



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (縄文～近世) | 31. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原西奥古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高校裏山古墳群 | 89. 雄町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒神廃寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若宮古墳 (古墳後期) | 90. 乙多見遺跡 (弥生) |
| 4. 上の段室跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乞食谷古墳 (古墳後期) | 91. 関遺跡 (弥生) |
| 5. 矢望城廃寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多廃寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 播鉢池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 原尾島遺跡 (弥生～室町) |
| 9. タイミ山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂矢城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (仮称) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊主山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (県立岡山病院) 遺跡 (平安～鎌倉) | 98. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 71. 散布地 (旧名：大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 14. 若宮八幡裏古墳 (古墳) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 73. 散布地 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳前期) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 絵図遺跡 (弥生～平安) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 操山103号墳 (古墳前期) |
| 18. 鳥山城 (笹ヶ迫城) 跡 (室町) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 77. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 105. 網浜廃寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七つ坊墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 78. 賞田廃寺 (飛鳥～室町) | 106. 網浜茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 79. 賞田廃寺窯跡 (奈良) | 107. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 21. 半田山城 (戦国) | 51. 津倉古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 操山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 52. 妙林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 53. 石井廃寺 (奈良?～室町) | 82. 備前国府関連遺跡 | 110. 湊茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 54. 青陵古墳 (古墳前期) | 83. 北口遺跡 (弥生～室町) | 111. 湊荒神遺跡 (奈良～室町) |
| 25. 津島東3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 55. 十二本木塚古墳 | 84. 備前国府跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山経塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 56. 富山城跡 (室町～江戸) | 85. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | |
| 27. 不動堂古墳 | 57. 矢坂山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 58. 矢坂山山頂遺跡 (弥生) | 87. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 妙見山城跡 (戦国) | 59. 矢坂山東古墳群 (古墳後期) | | |
| 30. 釜田遺跡 (弥生他) | | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁷⁾、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁸⁾、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刻印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²⁹⁾などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺³⁰⁾が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡³¹⁾、そしてその西約500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³²⁾が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理学の研究や発掘調査成果から摂関家殿下渡領である鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土³³⁾し、また、南東1kmの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³⁴⁾。旭川東岸では、百間川遺跡群において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝などの大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが調査されている³⁵⁾。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

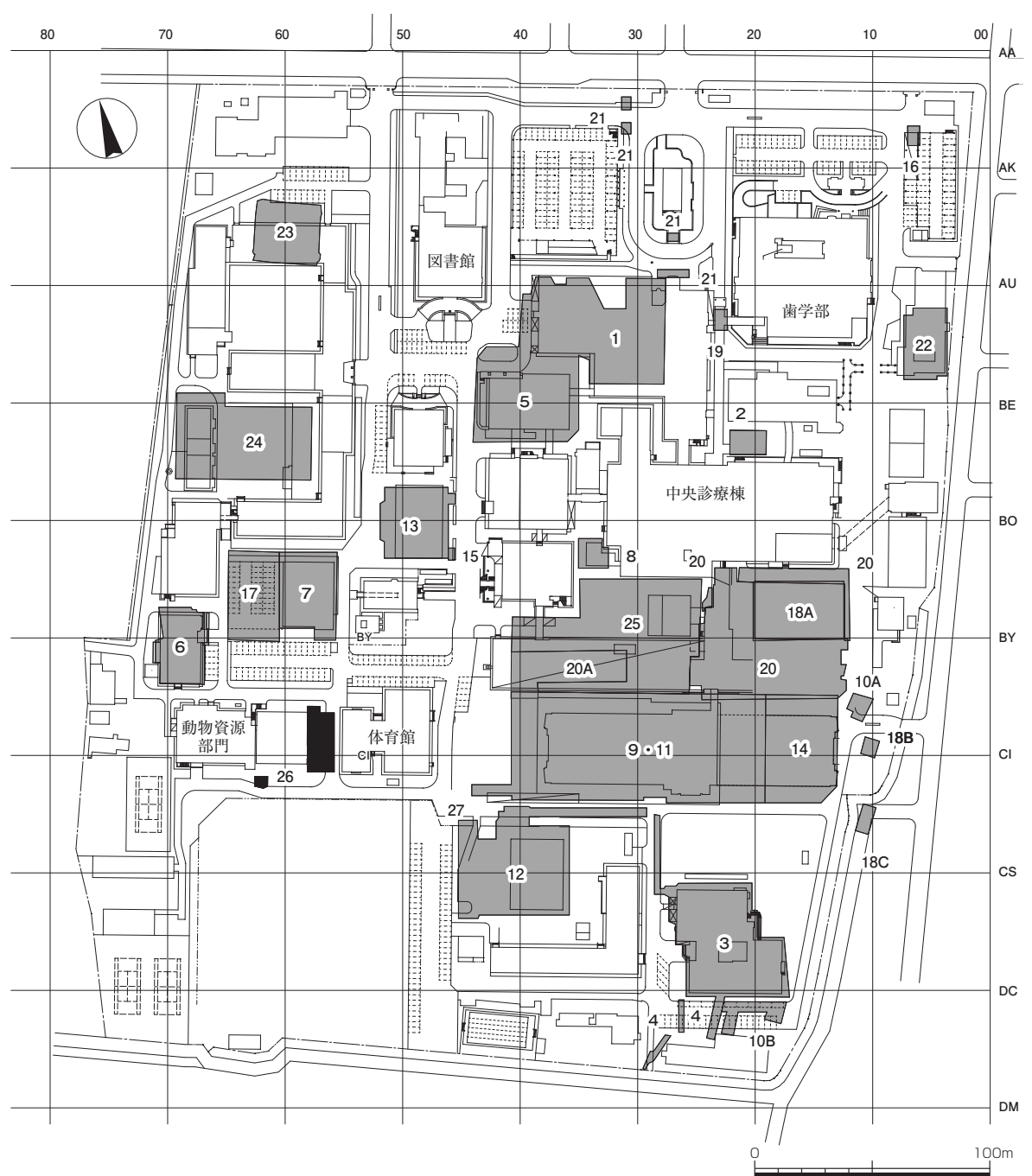
第2節 鹿田遺跡

a. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内に所在する鹿田遺跡の調査にあたり、周辺の市街地街区および構内の建物主軸に合致させた局地座標として、鹿田地区構内座標を設定している（図2）。鹿田遺跡の調査における位置関係の記録は、すべて構内座標系に基づくものである。

1983年から2002年度までの構内座標は、国土座標第Ⅴ座標系（日本測地系）の（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、同座標軸の北を東へ15度回転させた座標軸を基軸とする局地座標系であった。2002年4月1日の改正測量法施行にともない、本センターでも2003年度以降に刊行した報告書からは世界測地系を採用することとしたが、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系へと変換することとした³⁶⁾。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。結果、構内座標原点の座標は、（ $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ ）と変換された。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は平行とはならない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は、日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北ではない。

構内座標は、原点から5m間隔で座標軸に平行するグリッドラインを設定して細分する。ライン名については、東西ラインでは2文字のアルファベットの組み合わせ、南北ラインは2桁のアラビア数字で表記している。すなわち、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとにAB、AC、…、AZ、BA、BB、…、BZとし、原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとに01、02、…、79、80とする。これらのラインの交差によって形成される5m四方の区画は、その北東角で交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区、…、



- | | | |
|---------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 10 第10次調査：共同溝関連 | 19 第19次調査：渡り廊下 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 11 第11次調査：病棟 | 20 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 21 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 5 第5次調査：管理棟 | 14 第14次調査：病棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外溝】 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 8 第8次調査：RI治療室 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 26 第26次調査：動物実験施設（本調査地点） |
| 9 第9次調査：病棟 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |

※建物名称は調査次の呼称による。

図2 岡山大学鹿田キャンパス内における発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

と呼称する。

b. 遺跡の概要

2017年度までに27次にわたる発掘調査が行われている本遺跡は、弥生時代中期末葉・後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後半～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代に集落が営まれた遺跡である。また、古代～中世では、藤原摂関家殿下渡領鹿田庄の故地とされる。

【土地形成と集落展開】

本遺跡出土土器で最も古く遡る時期は縄文時代中期末であり、それに続くのが弥生時代早期・前期である。いずれも第1次調査地点で出土している³⁷⁾。出土点数は各1点で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において陸地が存在した可能性を示唆する。こうした状況から、本遺跡は旭川河口に形成された縄文時代の砂堆をベースにした臨海性の高い集落遺跡と評価される。

その後、近年の調査から、地形面での大きな変化は弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことが分かってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成し（第23次調査地点³⁸⁾）、中期中頃には河道が多量の土砂によって埋没している（第12次調査地点³⁹⁾）。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

最初に集落が形成されたのは第1次調査地点（岡山大学病院外来診療棟）である。弥生時代中期末葉には、このごく限定された範囲に遺構が形成されており、東西50～60m・南北50m程度の比較的小さな居住域が復元される。後期に入ると、居住域は東側（第19次・22次調査地点⁴⁰⁾）と南側（第5次・2次・18次調査地点⁴¹⁾）に広がり、東西220m・南北100m程度の範囲に拡大する。古墳時代初頭には、東側の広がりには影を潜め、西側（第17次調査地点⁴²⁾）に居住域が展開する。居住域周辺域（第12次・13次・20次調査各地点⁴³⁾）には、土器溜まりの形成が顕著となる。また、南側（第9次・11次・14次調査地点）には後期～古墳時代初頭のの水田域が確認されており⁴⁴⁾、同時期には、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。一方、北側（第21次⁴⁵⁾・23次調査地点⁴⁶⁾）の調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側が、深い谷地形あるいは河道が中世段階まで存在したことが明らかとなっている。

このように、弥生時代中期後葉～古墳時代において、鹿田遺跡は旭川西岸部のなかで、北側の遺跡集中域から切り離されて海に突き出したような場所に形成され、沖積作用の影響を受けながら居住域が展開した状況が復元される。

平安時代前期においてもこうした地形に大きな変化は確認できない。遺跡の南側は第1次調査地点と1m程度の比高を残している。こうした地点が耕作地として利用されるのは中世以降である。

10世紀における集落の中断を経て、集落が改めて成立する平安時代後期（11世紀～12世紀）の集落構造は以前とは全く異なる。現在の地割りに沿った方向を示す溝で区切られた屋敷地の集村景観が復元される⁴⁷⁾。特に、12世紀には、東西方向について1町単位を基にした方形地割りがなされ、敷地北端と南端のやや低い地域には耕作地の広がり確認される（第16次調査地点ほか）。さらに、鎌倉時代には、溝で区切られた開放的な屋敷地から、大形の溝を屋敷地周辺にめぐらせた閉鎖的な屋敷地空間へと変化する⁴⁸⁾。屋敷地の拡大も特徴的である。該期の屋敷地は、溝で区画された敷地に数棟の建物群と井戸の構成が一般的であり、中には墓を有する場合がある。瓦器や東播系の遺物や輸入陶磁器など、各地域からの流通品が数多く出土しており、流通拠点の様相をうかがわせる。瓦や呪符木簡、そして銅鏡などは宗教的建物の存在を彷彿とさせる。こうした状況は、殿下渡領「鹿田庄」の実態を反映していると考えられる。

鎌倉時代末には、屋敷地の配置は、第9次・11次・14次調査地点付近を軸に東西方向に並ぶ傾向を強め16世紀に至る。街道の存在も見え隠れしているようである。江戸時代（17世紀）に入ると、屋敷地から耕作地へと遺跡

の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山城下町の再編による影響が想定される。ただし、18世紀には第18次調査B地点に船着き場⁴⁹⁾や第18次調査A地点周辺に屋敷地が存在した可能性があり、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えてきている。

【海・河川との関係】

本遺跡は旭川西岸平野の南端付近で、海に突き出すような地形に立地していることは前述したとおりである。弥生時代～古墳時代には、海との関連を窺わせる製塩土器や土鍾・石鍾が数多く出土する。また、瀬戸内海南岸や畿内からの搬入土器の存在も注目される。旭川西岸における集落の中で、一定の役割をもつ場所であったと考えられる。

その後も、平安時代前期の橋、そして同時代後期に属する傀儡回しの人形頭である猫形木製品⁵⁰⁾や鎌倉時代末～室町時代初めに属する猿形木製品⁵¹⁾などは人や物資の盛んな流通を示しており、瓦器や国内外からの陶磁器類・砥石や石鍋など多様な出土品とあわせて、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端を端的に示している。

【藤原摂関家殿下渡領「鹿田庄」との関係】

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされている⁵²⁾。同時期の資料としては、第1次発掘調査地点（岡大病院外来診療棟）付近で確認された建物群や大形井戸（おおよそ8世紀後半～9世紀代初め）のみであったが、近年集落の西端に位置する第24次調査地点で8世紀後半の井戸が加わった⁵³⁾。その内部からは絵馬が2枚重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。また、中世における流通拠点の性格も、鹿田庄の性格を考える上で重要である。加えて、近年の調査では、第25次調査地点において13世紀後半～末の烏帽子⁵⁴⁾、第20次調査地点において16世紀の猿の水滴が出土しており⁵⁵⁾、本地点の管理者が武士であったことをうかがわせる。

本章は、下記報告の文章に一部加筆・修正したものである。

山本悦世編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡I』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
g 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
h 高田恭一郎編 2000『北方地藏遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
i 柳瀬昭彦 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
j 柳瀬昭彦 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会

- (7) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995「百間川原尾島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (8) a 高畑知功 1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
b 草原孝典 1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度』
- (9) 前掲註(6)a～f 文献
- (10) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
- (11) 高橋 護・正岡陸夫ほか1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- (12) 前掲註(4)a 文献
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b 正岡陸夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
b 中野雅美・根木修 1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史』考古資料編
- (16) 前掲註(6)a～f 文献
- (17) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (18) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (19) 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史』考古資料編
- (20) 高畑知功 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
- (21) 前掲註(3)文献
- (22) 宇垣匡雅 1990「網浜茶白山古墳・操山109号墳の測量調査—吉備の前期古墳Ⅲ—」『古代吉備』第12集
- (23) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (24) 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶白山古墳』岡山市教育委員会
- (25) 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館
- (26) 近藤義郎 1986「湊茶白山古墳」『岡山県史』考古資料編
- (27) 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- (28) 高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
- (29) 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- (30) a 中野雅美 1977「吉備における平城宮式瓦について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
b 草原孝典 2002「鹿田庄の設置背景」『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (31) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (32) 南健太郎編 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
- (33) 前掲註(31)文献
- (34) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35 日本考古学協会
- (35) 岡山市教育委員会 2006『大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』
- (36) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- (37) 前掲註(18)文献
- (38) 南健太郎編 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- (39) 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
- (40) a 野崎貴博 2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
b 岩崎志保 2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- (41) a 前掲註(18)文献
b 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
c 山本悦世ほか 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- (42) 山本悦世 2008「鹿田遺跡第17次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- (43) a 前掲註(39)文献
b 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊

- c 山本悦世ほか 2011「鹿田遺跡第20次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
- (44) a 山本悦世編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- b 岩崎志保 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- (45) 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- (46) 前掲註(38)文献
- (47) a 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移—鹿田遺跡の場合—」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- b 山本悦世 2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
- (48) 前掲註(47)文献
- (49) 光本 順 2013「第18次調査B・C地点」『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- (50) 前掲註(49)文献
- (51) 山本悦世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- (52) 「鹿田」の初出は817（弘仁4）年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は900（昌泰3）年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (53) 前掲註(52)文献
- (54) 山口雄治編 2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- (55) 前掲註(43) c 文献